第１回滑川市まちづくり共創会議開催結果

開催日時　　令和４年９月 16 日（金）　17:00～19:00
会　　場　　滑川市役所３階大会議室
出 席 者　　委員 15 名、藤野英人特別アドバイザー、
　　市長、副市長、総務部長、産業民生部長、観光課長、事務局（企画政策課）

	委　員	備　考
1	星名　照彦	座長
2	廣瀬　淳	副座長
3	福井　信英	
4	清水　義彦	
5	土肥　薫	
6	石田　拓人	オンライン
7	深井　あゆみ	
8	樋口　幸男	
9	桶川　高明	
10	砂子　典章	
11	金川　奈那美	
12	浦田　結那	
13	長瀬　めぐみ	オンライン
14	由井　千尋	オンライン
15	山内　大河	オンライン

議　　事　　地域資源の活用と地域のブランディングについて

　観光課より市の現状を説明した後、ポイントごとに自由に意見を交わしていただいた。内容については別紙のとおり。

【議　事】地域資源の活用と地域のブランディングについて

座長
最初に今回のテーマについて、事前に話したい内容について資料を提供いただいている、２名の委員から順に発言をお願いしたい。

委員
まず、今回の会議は何を目的にしているのか疑問に感じた。「ビジョンや政策について、皆さんで話し合っていこう」という話だったと思うのだが。
そこで私の方では、行政にビジョンが必要な理由を踏まえて、この会議をどのように使っていくのかを話し合うための資料を作った。
ビジョンは「将来、自分がなりたい姿」のように言われることが多い。今回も、「行政と市民が一つの目標を目指して、新しい地方自治を創っていこう」ということだと思っている。
市にビジョンがない場合は、最終的な施策の物差しは市長の価値観となる。市にビジョンがあれば、あらかじめ目指す場所が明確になっており、そこに行くためにはどうしたら良いかを各部署で考えていくことができる。大きな目標をみんなで共有することで、新しい仕組みが生まれてくるというところがビジョンの必要性だと思っている。
行政は多岐に渡る事業を展開しているので、それらを一つのビジョンで全部統合させていくのか、それともある程度のゾーニングをしながら、ビジョンが分かれていくのか。それが今回の会議の一つのゴールではないかと考えている。
次に今回のテーマであるブランディングの話である。
「ブランド」は「僕はここにいる」と立てる旗を創ること、「ブランディング」は選んでもらうために「旗を振り続けること」だと思っている。「ブランディング」と言うと「ブランドを創ること」だと思われがちだが、「ブランドを発信し続けること」が「ブランディング」である。
「ブランディング」には必要なステップ（１. 自分が伝えたいコトを固める、２. 誰に伝えたいか決める、３. なぜ伝えたいのか把握する、４. どこで、いつ、どのように伝えるか、５. ずっと続ける）があり、１番から３番が大事な部分である。特に３番目がビジョンに関わってくるところで、何故それをやりたいのかを固めて共有するから一つの方向に向かって行くことができる。
では、地域ブランドは何故必要なのか。
地域経済を活性化していこうということで、「外貨を稼いで地域内で循環させていこう」という話である。例えば、商品を作って地域外でお金を稼いでくる。そのお金をチェーン店ではなく地元のお店で使う。そうすると地元の店で雇用が生まれ、それがまた他の店で使われる形でどんどん地域経済が活性化していく。
ただし、行政が行うブランディングには課題がある。行政には「すべてに対して平等に接したい」という思いがある。ブランディングは突き詰めてしまうと、やらないことを決めることがブランディングになるが、行政はその守備範囲を決めるのが非常に苦手な事業体である。
そのような課題への私の対案は、「ホタルイカという生業に絞る」、「ホタルイカを愛してやまない人に絞る」、「ホタルイカをもっと美味しく食べたい人に絞る」ということである。
それを行政主導ではなく民間事業体で行って、ホタルイカに集中していけば、この早月川から上市川の間ということにも拘らずに広げていくことができるのではないか。

また、ブランドを継続させるために必要となるステップもある。行政で「特産品を作ろう」という話になると、いきなり「商品開発」からスタートしていくのだが、「現状の課題共有」、「ブランドの定義を共有」から、「主体性のある事業体の構成」、「技術、素材、販路の可視化」へと順にステップを踏んでいかないと、継続したものにはならない。

委員
ホタルイカだけに軸を絞った方がいいという話があったが、私は逆に、ホタルイカだけに絞ることはリスクだと考えている。何故なら、ホタルイカはシーズンが限られており、シーズン外のほたるいかミュージアムや滑川市のブランディングはどうするのかという問題があるからである。
ブランディングも大事であるが、私が最初に決めないといけないと思ったのは、タラソピアとアクアポケットをどうするかということである。二つの施設はデッドラインが決まっている。その上でタラソピアを解体するのか、改修するのか話をしないといけない。
また、東京でのホタルイカは、メディアでは見かけるが、人々の生活には浸透していないという印象である。例えば、東京のスーパーで見かけるホタルイカの９割は兵庫県産である。また、生協の特集で売られている富山県産ホタルイカは魚津市の漁協が販売者になっており、滑川市の「な」の字も出てこない。渋谷に乾き物の店があり、日本海の海産物の干物なども売っているが、やっているのは東京の会社のようである。
私は東京や人が多い大都市に対して、ホタルイカの名前を売った方が、観光客などに対するブランディングとしては良いと思っている。富山県のホタルイカは高級ラインになっているので、紀伊國屋やクイーンズ伊勢丹などの高級スーパーなどに売るのはどうかと考えている。
また、海洋深層水天日塩は、能登の塩もあるので差別化しないといけないし、パッケージにも問題があると感じている。
その他にも青雲閣やみのわ温泉村など、20 年以上前からある施設の老朽化も進んでいる。まず「何をやめるか」や「壊すのか」ということについても、一緒に議論していくべきなのではないか。

座長
今の２名のご提言について、藤野特別アドバイザーのご意見などを伺いたい。

藤野特別アドバイザー
それぞれ重要な指摘があったと思う。
その中で、「何を議論するのか」という話が大事だと思う。総論をしっかり話すのか、各論をたくさん話すのか。僕はどちらも意味があることだと思うので、どちらでも良いと思う。ただ、僕の趣味からすると総論から話したい。大きな組織や大きなチームについて話す時には、総論から話すことが大事である。
総論とは何かというのは、僕らがどうありたいかという「Ｂｅ」の問題がとても大事である。「何をするのか」ということ以上に、僕らが「どうありたいのか」、「どういう真意でやりたいのか」というところを、少なくともこのメンバーの中では気持ちを合わせることができる。結果として大きなものができる可能性があるので、「Ｂｅ」と「ＷＨＹ」はとても大事である。
また、先程、滑川と魚津の話が出た。僕は朝日町もフォローしているが、朝日町では「入善町がどう」と言う。朝日町も入善町も東京の人からすると知らない町であり、どちらが

良いかはあまり関係がない。ただ、地元の人にすると、これはとても大事なことである。だから、地域ブランドは射程距離も重要となる。
例えば、十勝という地域はない。十勝というのは広域連合郡である。北海道の帯広や広尾、芽室などが集まって、十勝という巨大な地域ブランドを創っている。自分たちで「芽室がどう」とか「帯広がどう」とか言わないと決めて、十勝でブランドを統一し、みんなで儲けている。
滑川としてその時に僕らがどう考えるかと言うと、滑川のことは勿論考えるが、滑川の周辺のことも儲かるように考える。「僕らと接したら全部儲かる」みたいな、大きな価値観でやれないか。矛盾するようだが、「みんなのために」と考えている人が結果として一番儲けることができる。
だから、滑川というものの射程距離をどこまでに置くのかというのはとても大事だと思う。富山県はウェルビーイング先進県で、「幸せる富山」という言葉を創って、幸せ人口 1000 万を目指す。要するに富山県と富山県民と接したらみんな幸せになるという概念を持ってきて、それで僕らがみんなを幸せにする主体だと考えた。
それならば、滑川にそれを上回るビジョンがあったら格好良いのではないかと思う。
その原則の中で、「ホタルイカをどうするか」とか、「塩をどうするか」とか、「地域資源をどうするか」という風に考えていった方が答えは大きくなるのではないか。
だから滑川市の人たちよりも、僕らが「どうありたいのか」、「どうしたいのか」とか、「何をしたらいいのか」というところを考え、そこからホタルイカとかほたるいかミュージアム、タラソピアをどうするのかというような話をしていくと良いと思う。
色々考えた上で、最終的にホタルイカ一本に集中戦略というのもありだと思う。ありだと思うが、まずは僕らが「どうあるのが格好良いのか」というところから考えて、そこから絞り込んでホタルイカというのが良いのではないか。

座長
藤野特別アドバイザーのご意見も踏まえた上で、みなさんの意見をお聞きしていきたい。まずは、市の提示した資料を元に、１番目のホタルイカと海洋深層水についての①市の施設についてどう思っているかなどから順にご意見・ご提言をお願いしたい。

委員
ホタルイカシーズンは毎日数トンという量を出荷していても、東京の高級スーパーには並ばないのが現実である。それは高級スーパーですら手が出せないレベルの値段であることも多いからである。
ホタルイカに特化するのが良い悪いは別にして、どうしても３月末になると滑川のホタルイカは注目される。富山県中でホタルイカが獲れるにも関わらず、取材は必ず滑川市に来る。これは滑川市の強みだと思うし、滑川市を「ホタルイカの町」として育ててくれた先人たちのおかげであると思っている。
ほたるいかミュージアムやタラソピアの話をすると、老朽化など色々な問題がある中で、「壊す」とか「やめる」とか言うのは簡単だが、「どうやって継続していくか」とか、「もう少し面白いものにできないか」というのが課題としてある。その中でタラソピアに関して言うと、10 月に予定されているサウナイベントが一つのヒントになるのではないかと思っている。今までは海洋深層水を温めて使っていたところを、サウナの後に身体を冷やすということに使う。通常は 17～18℃である水を海洋深層水であれば３～４℃。そのまま使えるかどうかは別にして、そういうものを求めて来る人もたくさんいる。今のサウナブー

ムに乗っかるというのも一つの手である。
観光という面において言えば、海上観光は出航率が５～６割であることが課題であると以前から感じていた。県外や国外から来ても、ホタルイカを観ることができない人が居る。滑川市は都会でもないので、他に何も見るものがない。それを何とかしたいと思っており、ホタルイカ加工場の工場見学などを試みていた。
ただ、私の目標はそこではなく、地元の小学生である。児童の話を聞くと「ホタルイカが嫌い」という子は結構いるので、茹でたてなどの、本当に美味しいホタルイカを食べて、その子たちが、滑川市にはホタルイカという素晴らしい資源があって、どのように加工しているのかというところを少しでも知ってもらってから、将来、全国に出てほしい。そこで自信をもって「滑川市はホタルイカの町」だと言えるようになってほしいというのが、私の夢である。
今の時代、漁師の成り手不足の問題もある。だが、漁師になってくれる人がいないと、加工業者も生き残っていけない。漁師になってくれる若い子たちを育てるという意味でも、私はホタルイカについて発信していく意味があると思っている。
また、観光船も湾岸クルージングとしては良い船だと思うが、ホタルイカを観るという観点では適していないと感じている。

委員
言いたいことは四つほどある。
一つは、ホタルイカは滑川市のキーだが、単なる食材や、観光資源という捉え方や切り口だけでは、もう駄目なのではないかと思っている。私は、富山県のホタルイカの一番素晴らしい点は、サステナブルな食材だという点だと思っている。産卵を終えて、これから死に逝くホタルイカが、富山県の特殊な地形によって海岸に上がってくるので、それを獲って食卓に並べて美味しくいただく。この限りある地球資源を無駄にせずに、産卵を終えたものだけを獲るというところは、滑川の売りになるのではないかと思う。「ホタルイカの町」であり、持続可能な消費、持続可能なまちづくり、持続可能な地方都市、そういうもののモデルになるというところが、良いのではないか。だから、僕は「サステナブルな町」、「サーキュラーエコノミーな町」というところをビジョンの根底に据えたいという提案をさせていただく。見た目としては、「ホタルイカの町」で良いと思うが、その根底にあるのは生き様とか獲り方とか、地域と共生しているというところを前面に押し出していき、ストーリーとして発信していくというところが大事で、その最終的な結果として、美味しいホタルイカがあるという感じにすると良いと思う。
二つ目は、一つ一つの問題をぶつ切りで議論しているような気がするが、多分これだと解決しない。良いアイディアというものは、複数の問題を同時に解決するものである。今回の議論も、山と海と町でぶつ切りに議論するのではなく、山と海を繋げるにはどうしたら良いか、海と瀬羽町を繋げるにはどうしたら良いか。その両方を繋げて、山から海へ、海から町へ、町から山という形で動線を作らないと上手くいかないのではないか。「ぶつ切りから結合へ」ということを、二つ目のメッセージとしてあげたい。
三つ目は、滑川市を愛しているという気持ちを表すのであれば、事業という形にすべきである。僕は世界に先駆けて、寄附モデルを作るべきだと思っている。市民が「この事業をやりたい」とか「これが良い」と思ったことに対して、月 1,000 円、年間 1 万円くらいを投下して財源をつくっていく。その財源を藤野特別アドバイザーのようなファンドレイザーなどに委託して、増やしていくと同時に使っていく。そのような「市民基金」を作るべきだと思っている。そのためには、寄附を集め発信するファンドレイザーや、運用する人

などの専門の人材が必要になる。日本には寄附をしたいという人が山ほどいるが、その受け皿がないというのが現状。滑川基金をつくって、ちゃんと運用するということを一つのアイディアとして提案する。
四つ目は、もっと若い市民の力を活用すべきではないか。これには費用もかかるので、先ほどの寄附のような資金が必要になる。例えば、タラソピアを潰さないのであれば、思い切って若い起業家に任せる。第３セクターに頼る必要はない。でも、市民たちの手で何かをやるのであれば、若い人たちがチャレンジできるような施設として運用する。「民間を活用する」「若い人たちの力を活用する」。これが四つ目のメッセージである。
最後に、藤野特別アドバイザーの「Ｂｅ＝どうありたいか」を考えるというのは、とても良いと思った。常に自分たちが世界に対してどんな貢献ができるかということを念頭に置いて考えていった方が、中長期的な目線でいうと良い結果に繋がるのではないかと思うし、市民の誇りにも繋がると思う。その市民の誇りが、最終的には人材が戻ってくる、そんな町になるのではないかと思っている。「どうありたいか」と言うと、世界の中で何らかの形でモデルになる都市でありたいと僕自身は思っている。

委員
滑川市のホタルイカを見た時に、青白い光が美しいと思った。あの美しいホタルイカの光と、町の中でやっているベトナムランタン祭りやネブタ流しなどに共通している光に注目して、滑川市自体を「光と明かりの町」にしていけたら良いと思っている。

委員
親子で観光に訪れると考えた時に、滑川市には子どもや親子で一緒に楽しめるようなものが少ないと感じている。ほたるいか海上観光にしてもただ光（発光の様子）を見るだけである。例えば、地引網体験のような、一緒に楽しめるようなものがあれば、若い世代がもっと行きたいと思うのではないかと思った。

委員
私は滑川市民ではないので、まずタラソピアの存在自体を知らなかった。ほたるいかミュージアムについても在ることは知っていたが、何なのか全く分からない。滑川市民にしかわからないものが多い。ホタルイカというのは分かるが、何がしたいのか良くわからない。

委員
本当に発信してないと思う。
地元の人に「滑川に何か良いところはあるか」と訊いても「何もないところだ」と言う。活性化している観光地に行くと、半分落としながらも持ち上げるものであるが、滑川市は落としっぱなしで褒めない。まず、そこを意識改革していかないといけない。
また、ほたるいかミュージアムやタラソピアなどの施設はすべて元から赤字だった。元々、稼いでいた施設の話ではない。ただ、何のためにやっているのかというところが伝わっていないのだと思う。

座長
次に２番目の海・山の景観や活性化についてご発言をお願いしたい。

委員
10 月 1 日に東福寺野自然公園で、東福寺野キャンドルナイトという光と灯のイベントを開催する。これは観光協会の他に、滑川市の中で光と灯のイベントを色々と一緒に活動している団体と開催するものである。
東福寺野自然公園は山の上にあり、行きづらい。公共交通機関もあまりないので、何かそこに行く理由を作ることができたら良いと思って、僕たちは活動をしている。東福寺野から見る滑川や、夜景は本当に美しい。その夜景と一緒に、キャンドルを置くだけで人がたくさん集まるのではないかと考えていて、そういった面白い仕掛けをどんどんしていきたいと思っている。

座長
東福寺野自然公園について、他にご意見があれば発言をお願いしたい。

委員
東福寺野自然公園の入り口は非常に分かりにくい。安田の交差点に一応、東福寺野自然公園の看板は立っているが、唐突に看板だけが立っていて分かりにくいので通り過ぎてしまうと思う。
また、滑川市は地理と言うか、道路がとても分かりにくい。市で作成しているマップもすごく古いと常々思っていた。もう少し分かりやすく、若者受けするような感じで作成してはどうか。

委員
県外からの友人などを滑川漁港やほたるいかミュージアムの裏の海岸周辺に連れて行くと、「すごくいいね」と言ってもらえる。あの一帯は今、コンクリートで固められてしまっている。波の高さなど、色々と懸念するものがあってあのような作りになっているのだと思うが、あの場所を開発するのは難しいのか？

市
ほたるいかミュージアム裏手の階段護岸は、滑川漁港も含めて富山県の管理になっている。また、漁港施設ということで、あの場所を開発するというのは、今現状ではなかなか難しいと考えている。

委員
観光客にとってはとても貴重な風景だと思うので、今後、景観に関して何か手をつけるのであればほたるいかミュージアムの裏のエリアについても考えてもらいたい。

委員
ゴールデンウィーク頃には、ほたるいかミュージアムから海の方に出ていく人がたくさんいて、そこから堤防を上がった先の景色を見て驚かれる。日頃は私も良いとは思わないのだが、その時に私も振り返ってみると、「やっぱりこの風景はすごい」と思う。これを活用できないか。
今まではほたるいかミュージアムの、私たちが思っている方の「表側」だけを見せてきた。だが、本当は私たちが「裏側」だと思っていたところにこそ価値があるのではないか。その中でテラスを活用したビアガーデンやサウナイベントなどという形で、海側を活用しよ

うという考え方は、少しずつ出てきている。
山の景色が良いものだというのはわかっているが、海側に住む者としては、あの景色を大事にしたいと思っている。

藤野特別アドバイザー
そもそも論の話になるが、地域の景観の何が良いのかは、僕らが話してはいけないことである。自分ではなく、「観光客が来たときに、何に感動したか」という、その視点がとても重要である。地元の人は見慣れた風景なので、「何が面白いのか」、「何があるのか」、わからなくなってしまっている。だから、観光客や外の人のインタビューを強化する必要がある。2023 年になると、インバウンドがまた戻ると思う。今は空前の円安であるし、日本ではインフレと言っても、外国から見ればデフレに近い状態になっている。これからインバウンドラッシュになって、外国人観光客の取り合いになるのはほぼ間違いないと思う。その時に、「外国人の目から見て何が面白いのか」というところのリサーチが重要だと思う。例えば、コロナ前には姫路駅の新幹線ホームや日本橋の下など、地元の人からすると予想外である外国人の観光スポットというものがあった。姫路駅で横を猛スピードで新幹線が通るスリルを楽しむ、などは僕らでは全然考えられないことである。
「他人視点をどうとるのか」、その他人視点で得たものを「どう拡大して素直に設備投資をしていくのか」ということがとても大事な視点だと思う。地元の中で議論するというのも大事で、みんなが本音で「あれはいけてない」というところは、変えなくてはいけない。でも一方で、「他人目線で面白いところを掘り返す」ということは、是非やっていただきたい。

委員
岐阜県の子と長野県の子たちが橋場の辺りの海に遊びに行った時に、こちらが驚くほど喜んだ。愛知県や三重県の子たちも一緒になって、「海の色が違う」とか、「石の海岸なんて見たことがない」とか。また、山梨県の子が驚いたことは、歩道が広いということだった。「歩道が広いのは除雪の雪を寄せても人が歩けるように」という話をしたが、融雪消雪装置があることに驚く、道路が広いことにも驚く。僕たちが当たり前だと思っていることが当たり前ではないということに気づかされた。
県外の子たちを連れてきて、僕たち地元民が当たり前だと思っていることが「当たり前ではない」というところをどんどん発見してもらい、それをオンラインで発信していこうと考えた。紙ベースでは滑川市がやっていたが、不特定多数の県外の人たちなどに対して、人口流出を止めて、子育て支援の良さをアピールして、いかに滑川への移住を促進するか、移住と言う形で入ってもらおうと取り組んだ。でも、県外から来たばかりの大学１年生はアパートで生活し始めることの大変さを実感していて、「移住なんて簡単にできる話ではない。大学に行かなければいけないから来るのであって、義務的なものが無い状態で移住者を呼び寄せるというのは、無理に近い」と言った。その素直な学生目線の言葉が刺さった。そこで移住は最終ゴールとして、その前に交流人口を増やす。滑川に来てもらうための魅力発信をしたらどうだろうかということで、滑川の魅力をわかってもらうために、滑川の人と事と自然に触れて、余所者が来て、滑川の良さを発信する。特に若者の視点を取り入れるような形ができ上がったらいいなということで、この４年間発信してきた。
もう一つは、ベトナムランタン祭りのボランティアに学生を引き入れて、地元の人たちと交流する機会を持たせていただいたところ、「滑川の人がとても良かった」と。やはり地元で育てていく若者に、滑川の良さを知らせるような形づくりがとても大事だと思った。

私が狙っているのは、そうやって若者たちが、滑川に入って回遊して良さを知って、インターンシップに来て、うまくいけば就職。すぐに芽が出なくても、何年後かに転職などの機会に、滑川を思い出してもらえるように種を蒔いておく。少しでも心の敷居・ハードルを下げておく。県外の若者たちの視点をいただきながら、その子たちにも滑川の良さを植えつける。10 年先の種を蒔いておくような、そういう仕掛けがとても大事なのではないかと思っている。

委員
先程、滑川の「石の海岸に驚かされた」という話があったが、地元民としてはあの海岸の景観が嫌だと思うことがたくさんある。高い堤防があって、遠くまで海が見えないからである。その堤防を直してくれれば、人をたくさん呼べる気がした。

委員
５月頃の、ほたるいかミュージアムから山の方に向かって行く大きな道路の橋（辰野跨線橋）から見る朝の景色が最高だと思っている。
ただ、自転車で魚津まで青い線を辿ってみたらそれがサイクリングコースだとわかるとか、観光サイトなどを探し回って漸く桜の名所がわかるとか、色々な人に聞いて漸く宿場回廊の歴史を聞けた、というようなことが結構あった。滑川では自分で貪欲に情報を探しに行かないといけない。
滑川はほたるいかミュージアムの裏からも偶に星が綺麗に見える。東福寺野の方からだともっと綺麗に見えるので、「どこが一番綺麗なスポットなのか」を考えたりもするのだが、情報を探すのが若干面倒くさい。滑川には「ある」のに発信されておらず、みんなに伝わってないものがかなりあると思っている。そのような情報を集めて発信する人がいれば、市が集約して観光マップにするだけでも非常に嬉しい。

委員
先日、ほたるいかミュージアムに行って、ＶＲ体験会に参加した。あれは、ＶＲ開発に関して技術的にとても難しいことをしているので、一回体験して「すごいなぁ」で終わりでは勿体ない。どういう技術を使っているのかなど、そのＶＲの技術的にすごいところを教えるような催しがあれば面白いのではないかと思った。
また、何名かから「海が綺麗だから活かせないか」という声があったと思う。最近は新型コロナの影響もあり、オンラインでの作業が増えていて、一日中部屋に籠って作業していることがある。その時に、海を見ながら一日中作業ができる個室があれば、海を見ながら作業もできるし、一歩外に出れば空気も澄んでいて気持ちがいい。オンラインミーティング中でもカメラを回せば、相手側にも海が見える。相手が富山県に来た時に、「ここがあの時の海か」と思ってもらえれば、滑川に来てもらうきっかけにもなる。

委員
ほたるいかミュージアムの２階テラス席側を活用して、テントサウナのイベントを開催しようと動いている。９月にプレイベントで１回、この後は 10 月 29、30 日と 11 月にもイベントを開催しようと調整している。タラソピアは存続するかどうかの問題もあるが、海洋深層水は全国的に見ても珍しく、どこにでもある資源ではないと思うので、それを活かして、今の時代に合ったものに変えていけないかと考えている。タラソピアをすぐにサウナ施設にするというような、大きなことはできないと思うが、自由な動きができる民間から、

今のサウナブームの熱量を感じてもらい、そこに若者、県内外、市内の人が集まってくる様子を見て、体験してもらって、今後タラソピアやほたるいかミュージアム周辺で海洋深層水を活用する一つの選択肢としてサウナというものを実感してもらえたらと思っている。

藤野特別アドバイザー
最後に一言話をすると、今日色々な地域を見て回って、その中で一番印象に残り、良いと思ったのは瀬羽町である。こういう関係で色々な地方に呼ばれることが多く、北海道から沖縄まで行くのだが、旧宿場町はどこにでもある。みんな同じ社会課題があって、何とかしようとしている。その中でも特別に可能性があると思った。何故かと言うと、どこに行っても 70 代から 80 代くらいの難しい人がいる。
でも「なるほど」と思ったのが、瀬羽町は１回住民がほぼゼロになったという話。ほぼ住民全員がいなくなっているから、後に残っている人も今日何人か話をしたが、「この人は結構信頼できるのではないか」という人が中心にいる。これは可能性あると思った。結局は、「誰がやるのか」というところが大事である。
勿論、瀬羽町はまだ全然いけてない。町並みも綺麗ではないし、ケチをつける場所はいっぱいあるが、可能性は無限大だった。だから、ここの皆さんの力を借りて何かやると、すごく良くなるのではないかと思った。10 年くらいの目線でやるととても良い場所になるのではないかと感じた。

座長
時間の関係もあるので、本日の議事はこれにて終了とさせていただく。

了